

愛の手紙としての説教、そして教会

相馬伸郎

まえおき¹

『福音主義神学』17号、特集「釈義と説教」において、丸山忠孝氏は第三回神学研究会議（1985年）の総評を行った。主題は、「福音主義の聖書解釈と説教」であり、「聖書解釈・釈義から説教へ」が扱われた。その第三分科会の主題は、「釈義から説教における教会の位置づけ」とされた。しかし、発題者の二人とも、「主題そのものが不適切であるとして、泉田氏は、『教会における釈義と説教の位置づけ』と改題し、鷹取氏は、『教会を生活の座に持つ説教』とした。泉田氏は、『教会との健全な関係を失った説教は、説教者の独善と独語に終わってしまう』とし、鷹取氏は、『説教がいかにしたら『教會的』でありうるかを問うた』」（84頁）とある。25年前、ようやく福音派の中でも、『説教の教會的性格・本質』についての議論が出、認識が深められたのである。今回の研究会議は、どれだけこの基本認識²の上に立ち、これを深めると同時に広げることができているかが根本的に問われ求められよう。

¹ この論考は、「講演」のために準備した原稿を若干整理、小見出しをつけただけのものである。論文の体裁に、との編集者からのお求めであったが、諸般の事情でかなわなかった。心からお詫び申し上げます。

² 地方教会の平凡な牧師である筆者が、前回の第12回全国研究会議（『福音主義神学』第40号、特集「伝道」）に続き発題をお引き受けたのは、『説教』（説教の使信を教会外に向けて広げる伝道も含む）こそは、福音主義神学の究極の目標であり、しかもこれを主の曰ごと担うのは、牧師に他ならないと考えるからである。さらに、これは、ひとり説教者（牧師）個人の課題ではなく、全信徒、つまり教

I. 説教の本質（「何を語るのか」をめぐる研究会議のためのテーゼ

A 聖書と説教との相互関係

- a 神は、教会に、靈感された神の言葉（本質）である聖書（文書啓示）を与え、正典（教会の信仰と生活を規範する唯一の規範）として信じ認めさせられた。したがって今や、説教のことばの源泉は、この正典文書のみである。
- b 預言者にして神の生ける言葉なるイエス・キリストは、今も、聖書を通して、父なる神の御心であるみ言葉を語り続けておられる。彼は、ご自身の体なる教会を通してそれを遂行しておられる。したがって、教会の説教の中心的課題とは、このイエス・キリストにおける預言者職を継承し、主イエスご自身を指し示すことである。

B 聖書・信条・教会と説教との相互関係

- a 神は、御言葉の下に神の民である教会を招集される。教会は、聖書において語られる聖霊によって御言葉を聴き続ける。教会は、神の語りとしての説教に服従することによって絶えず形成（改革）される。御言葉に基礎づけられる教会は、教会の頭なる方から、「あなたはわたしを誰というのか」と、信仰を告白することへと常呼び出される。
- b 従って教会は第一に、聖書の信仰（教説）を把握し、告白し、賛美、礼拝することへと促される。教会によって告白された信条は、聖書によって規範される第二の規範として教会の実践を拘束する。ニカイア、カルケドン、使徒信条等の基本信条によって、公同教会の自己理解は確立され、全教会間と各個教会内における信仰の一致は保持される。
- c 改革された教会は、基本信条を展開し、各々の信仰告白を新たに生産した。教会は、これら信仰告白文書において、説教者をして恣意的解釈や独善的

会共同体の課題であり務めでもあると考えるからである。前回の応答、再応答における議論は、残念ながらかみ合わないままであった。この議論においても、信徒が軽視されて行くことはもとより、制度的教会が軽んじられることも起こってはならない。

教説に陥ることをとどめさせる。また、聴衆をして説教を正しく判定する規範を与える。説教者は、聖書と信条に拘束され御言葉を釈義し、語る。聖書の要約としての信仰告白は、説教に神賛美としての枠組みを与え、常に新しく信仰を告白させ、教会を建てあげるという目標を鮮明にする。こうして信条は、説教による教会形成の土台を提供し、その土俵を設定する。

C 聖書・信条・教会と説教者（教会の職務）との関係

- a 教会の職務は、御言葉の務めを巡って整頓される。（使徒 6:1-4）教会は、その第一位の職務として説教者を選び、立てる。説教者は、内的召命を前提とし、外的任職を通して説教の務めを担う。ここに説教の教会的性格が明らかにされる。したがって説教において「何を」語るのかという議論は、「誰が」語るのかという考察を必須のものとする。
- b 説教者は自らの職務を、自分自身のいかなる力にも依存させず、神の全権の委託として受け入れる。したがって説教は、召された神の権威に基づき大胆に語られる。同時に、その務めを神の教会の職務として受け入れる。したがって説教者は、私信を披歴するのではなく、信仰告白（教理）に基づき聖書を釈義、黙想し、教会の言葉として公的に教会の代表として語らなければならない。

D 説教と礼拝、伝道との関係

- a 神は、福音の説教によってご自身の臨在を示し、選びの民に信仰と悔い改めを与え、礼拝する共同体、神の民の祈りの家を形成される。教会は、命なるキリストが臨在する礼拝によってその生命を更新する。教会の生命は礼拝にあり、その生命とは、キリストご自身にある。したがって、主日礼拝式は、彼との交わりの手段、つまり、恵みの手段としての説教と聖礼典に集中する構造（リタージ）となる。
- b 神の国の地上における進展、拡大こそ神の御心の中心である。したがって神は、教会を神の国の地上における中心的なあらわれとして用い、神の民に、時代を超え地域を越えすべての人々に福音を告げ知らせることを命じる。終末における教会の存在理由は、ひとえに神の国の進展に奉仕する伝

道にある。ここに説教の伝道的性格が明らかになる。したがって説教者は、すべての人々に届く言葉を獲得する修練を重ねなければならぬ。ここに、「誰に」という聴衆の研究と、「どのように」というコミュニケーションのためのデリバリーやレトリック等の実践的研究をも必須のものとする。

E 恵みの手段としての説教—教師による説教と信徒による説教—

召しを受け、賜物を与えられ、教育訓練を受け、任職された説教者の語る説教はもとより、信徒による説教も、神の言葉の説教、恵みの手段としての本質において、何ら変わりがない。ちなみに、日本キリスト改革派教会では、一方を説教、一方を奨励と呼ぶのは、職務による区別を明示するためである。したがって、信徒が教会の公同礼拝において、御言葉を説き明かすとき、それは、神の言葉として聴かれることを求める。そうであれば、礼拝は成り立たないからである。また、子どもの教会（日曜学校）の礼拝説教においても同じでことが言える。ただし、任職された説教者の不在や不足等のゆえ、つまり、便宜を優先するゆえに信徒に説教を担わせることは慎重にすべきであろう。

II. 何を語るのか。一聖書と説教と教会そして聖霊の関係—

本論に課せられた主題は、「説教において何を語るのか」であるが、それは「説教とは何か」、つまり、その本質を問うことに他ならない。余りにも大きな主題であるので、ここでは、マタイによる福音書の一節とニカイア信条と第二イス信条そしてバルメン宣言に限定し、考察することとする。

A 聖書テキスト

マタイによる福音書第16章16—18節における「聖書」と「説教」と「教会」そして「聖霊」の関係
「シモン・ペトロが、『あなたはメシア、生ける神の子です』と答えた。すると、イエスはお答えになった。『シモン・バルヨナ、あなたは幸いだ。あなたにこのことを現したのは、人間ではなく、わたしの天の父なのだ。』

わたしも言っておく。あなたはペトロ。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てる。陰府の力もこれに対抗できない。』（新共同訳）

神は、聖書を通して、常に信仰を問い続け、すべての人々を天国へ招き続けておられる。教会は、説教を通してこの問いに自ら答え、信仰を告白する。また、教会は、この問いを問い続けつつ、選びの民を教会へと招き続ける。こうして、教会の説教は、神の救済行為、御心実現の手段そのものとして用いられる。説教の真の語り手は、神ご自身にほかならない。

福音主義教会は、「この岩」を、後のローマ教会の監督となった「使徒ペトロ」とする「首位権の説教」を否定することにおいて一致する。一方、この岩を「12使徒団」とする者もいる。改革派は、ペトロの信仰告白、ひいては「教会の信仰告白」として釈義する者が多い。ペトロの告白は、天の父からの啓示に根ざすとの主イエスの宣言に基づき、文書啓示としての「聖書」そのものとする釈義も成り立つかもしれない。しかし、「この岩」とは、「わたしがわたしの教会を建てる」と宣言なさった「キリストご自身」とする釈義こそ、より本質的な事態を示しているように。

「この岩」には、重層的な意義が込められていることも見逃せないであろう。そこで、注目すべきは、「この岩」とは、「あなたは、ペトロ」との、バルヨナ・シモンへの呼び掛けの後に宣言されている事実である。ペトロというあだ名は、はるか主イエスとの最初の出会においてシモンに命名されていた。ここで、改めてシモンがペトロと呼ばれる。それは、「あなたはメシア」と信仰を見事に告白したシモンに対する命名なのである。つまり、誰でも、イエスをキリストと正しく告白した者たちは、だれもがペトラ（岩）と「される」という意味であろう。

教会は、まさに、「信仰告白者（信徒）」を土台として、主イエスによって建てあげられて行くのである。この意味で、キリスト者は誰でも、原理的に、神の言葉への応答としての説教を担う使命と賜物（天国の教えを知った学者・神学者『マタイ13:51』）が与えられていると理解することができよう。

それを踏まえたとで、しかし、地上の教会は、神の言葉を説教する教師を信徒の中より選び、立てる。また、天国の鍵の権能を行使する役員を選び、

立てる。ここに、長老主義教会（制度的教会）の教会政治が必要とされ、成立する。ここでもまた、説教者は、教会の信仰告白（信条）に拘束されることによって、独善性や独語的過誤から守られる。また、説教の意義と目的に忠実に奉仕することへと規定される。したがって、信条を軽視もしくは無視する説教者は、教会つまり、信仰告白者である会員や役員を軽んじるばかりか、説教者本来の存在意義と目的を見失ってしまうであろう。したがって、聖書を説き明かす説教者は、そこで必ず教理（教会の信仰告白にもとづく言葉）を語ることとなるであろう。

ここで改めて、聖書と信条と教会の関係を整理する。御言葉によって御心を実現なさる神は、神の民を場とした救済史（聖書の内容）においてキリストを証言（聖書の機能）された。神は、聖書を神の言葉（聖書の本質）として教会に与え、教会の信仰と生活を規範する唯一の規範、つまり正典（聖書の権威）として、信じ認めさせた。こうして教会は、聖書（厳密に言えば、聖書とそれに対する信仰告白）を基としてその上にたち、かつ、その権威に服する。教会は、記された神の言葉において語り続ける神によって、絶えず、信仰告白することへと促される。同時に、教会は、自らの信仰告白を信仰の規範（信条・規範される規範）として受け入れることによって、絶えず、御言葉の支配に服す。教会の職務とは、まさに、この御言葉の務めを正しく機能させることを目標に整頓される。（使徒6:1-4）

B 信条

1 ニカイア信条における「聖書」と「説教」と「教会」として「聖霊」の関係
a 「聖書に従って三日目によみがえり」

ここで、主イエス・キリストが旧約に従って到来された約束の主でいらっしゃる、何よりもご復活が「聖書に書いてあるとおり」の事実として告白される。コリントの信徒への手紙1第15章3-4節の言葉が、そのまま、ここに引用されている。我々の信仰の営みのすべてが聖書に基づき、規範されるものであることが、この古代信条において明確に告白される。したがって教会は、この聖書の使信、福音を告知しなければならない。とりわ

け、復活の主の全権を帯びて復活の主ご自身を証することこそ教会の説教の核心となるべきことが示唆されている。

b 「聖霊は預言者を通して語りたまえり」

ここで、説教行為の主体は、聖霊なる神でいらっしゃる。聖霊は、旧約を通して語られてきた。さらに新約を通して語り続けられておられる。したがって教会は、旧約聖書における救済の歴史の使信の上に成り立つ。

何よりも、ここでの議論において決定的に重要な注目すべきは、聖霊が、預言者つまり説教者をお立てになられ、用いて来られた事実である。したがって教会は、説教者を中心にしてその職務制度を整える。それは、教会の霊的な制度であり、これらは、聖霊の豊かで自由なお働きからの逸脱などではまったくなく、聖霊の真実に他ならない。地上の教会は、何を基準にし、誰を説教者の務め、教職・教師に任職するのかを明らかにする。教派（教団）形成とは、その筋道を整えて、自らのアイデンティティを確立することであり、目に見える教会の神と人の前における責任である。

c 「使徒よりの、唯一の聖なる公同の教会」

地上の教会にとって決定的に重要になるのは、「使徒性」である。したがって、使徒性の解釈によって教会（教派）は、大きく規定される。

ローマ教会の首位権を否定した福音主義教会は、この使徒性（使徒的教会）を、なによりも使徒の教え、つまり「聖書」として解釈し、この教えに生きる教会として理解する。ローマ的な使徒的継承は、明確に否定される。一方で、福音主義教会が、教会の任職行為の重要性、その歴史性を否定するとき、非歴史的、非現実的な教会となり、混迷の内に、教会性を喪失するであろう。したがって、説教の本質を巡る問いは、「任職の教理」を不可欠のものとする。

前述のとおり、教会は自らの信仰告白において神と人の前に、公にする責任を自覚し、遂行するように招かれている。その最先端にして、絶えずの応答こそ、説教に他ならない。唯一の聖なる公同教会は、聖書の説き明

立てる。ここに、長老主義教会（制度的教会）の教会政治が必要とされ、成立する。ここでもまた、説教者は、教会の信仰告白（信条）に拘束されることによって、独善性や独語的過誤から守られる。また、説教の意義と目的に忠実に奉仕することへと規定される。したがって、信条を軽視もしくは無視する説教者は、教会つまり、信仰告白者である会員や役員を軽んじるばかりか、説教者本来の存在意義と目的を見失ってしまうであろう。したがって、聖書を説き明かす説教者は、そこで必ず教理（教会の信仰告白にもとづく言葉）を語ることとなるであろう。

ここで改めて、聖書と信条と教会の関係を整理する。御言葉によって御心を実現なさる神は、神の民を賜とした救済史（聖書の内容）においてキリストを証言（聖書の機能）された。神は、聖書を神の言葉（聖書の本質）として教会に与え、教会の信仰と生活を規範する唯一の規範、つまり正典（聖書の権威）として、信じ認めさせた。こうして教会は、聖書（厳密に言えば、聖書とそれに対する信仰告白）を基としてその上にたち、かつ、その権威に服する。教会は、記された神の言葉において語り続ける神によって、絶えず、信仰告白することへと促される。同時に、教会は、自らの信仰告白を信仰の規準（信条・規範される規範）として受け入れることによって、絶えず、御言葉の支配に服す。教会の職務とは、まさに、この御言葉の務めを正しく機能させることを目標に整頓される。（使徒6:1-4）

B 信条

- 1 ニカイア信条における「聖書」と「説教」と「教会」として「聖霊」の関係
 - a 「聖書に従って三日目によみがえり」

ここで、主イエス・キリストが旧約に従って到来された約束の主でいらっしゃる、何よりもご復活が「聖書に書いてあるとおり」の事実として告げられる。コリントの信徒への手紙Ⅰ第15章3-4節の言葉が、そのまま、ここに引用されている。我々の信仰の営みのすべてが聖書に基づき、規範されるものであることが、この古代信条において明確に告白される。したがって教会は、この聖書の使信、福音を告知しなければならない。とりわ

け、復活の主の全権を帯びて復活の主ご自身を証することこそ教会の説教の核心となるべきことが示唆されている。

b 「聖霊は預言者を通して語りたまえり」

ここで、説教行為の主体は、聖霊なる神でいらっしゃる。聖霊は、旧約を通して語られてきた。さらに新約を通して語り続けられておられる。したがって教会は、旧約聖書における救済の歴史の使信の上に成り立つ。

何よりも、ここでの議論において決定的に重要な注目すべきは、聖霊が、預言者つまり説教者をお立てになられ、用いて来られた事実である。したがって教会は、説教者を中心にしてその職務制度を整える。それは、教会の霊的な制度であり、これらは、聖霊の豊かで自由なお働きからの逸脱などではまったくなく、聖霊の真実に他ならない。地上の教会は、何を基準にし、誰を説教者の務め、教職・教師に任職するのかを明らかにする。教派（教団）形成とは、その筋道を整えて、自らのアイデンティティを確立することであり、目に見える教会の神と人の前における責任である。

c 「使徒よりの、唯一の聖なる公同教会」

地上の教会にとって決定的に重要になるのは、「使徒性」である。したがって、使徒性の解釈によって教会（教派）は、大きく規定される。ローマ教会の首位権を否定した福音主義教会は、この使徒性（使徒的教会）を、なによりも使徒の教え、つまり「聖書」として解釈し、この教えに生きる教会として理解する。ローマ的な使徒的継承は、明確に否定される。一方で、福音主義教会が、教会の任職行為の重要性、その歴史性を否定するとき、非歴史的、非現実的な教会となり、混沌の内に、教会性を喪失するであろう。したがって、説教の本質を巡る問いは、「任職の教理」を不可欠のものとする。

前述のとおり、教会は自らの信仰告白において神と人の前に、公にする責任を自覚し、遂行するように招かれている。その最先端にして、絶えずの応答こそ、説教に他ならない。唯一の聖なる公同教会は、聖書の説き明

かし、聖書への信仰告白である説教なくしては、使徒的教会として地上に存続しない。まさに、説教によって立ちもし、倒れもする。

d 「聖霊は〜御父と御子と共に礼拝せられ」

ニカリア信条は、聖霊が御父と御子を礼拝させるお方でいらっしゃるのみならず、共に礼拝を受ける神でいらっしゃると告白する。しかも、この聖霊を礼拝する出来事の下で、「預言者によって語られる」と告白がなされる。ここで、説教の礼拝的本質、教会形成の本質が確認される。三一の神は、特に聖霊によって聖書を通し、説教者によって語り続け、神の国を拡大し、ご自身の教会を地上に形成する。その御業は、すべて三一の神への礼拝へと収斂させられる。したがって神礼拝こそ、教会のすべての営みの目標となる。

2 第二スイス信仰告白第一章における「聖書」と「説教」と「教会」と「聖霊」そして「説教者」の関係

a 「神の言葉の説教は神の言葉である。」(第二スイス信条第1章)

第二スイス信条第一章は、冒頭で、聖書の正典性と十分性を告白する。次に、説教とは何か、また、何を語るのかと問いつつ、「神の言葉の説教は神の言葉である」との信仰を告白する。しかもそこでただちに「誰が説教を語るのか」と任職論を語る。最後に、聖霊の内的照明への信仰を告白しながら説教の必要性について告白する。

教会は、人間が語る言葉(説教)を、人間の言葉としてではなく神の言葉として聴かれるところに、成り立つ(1テサロニケ2:3)。それは、まさに、人間によって記された神の言葉(聖書)を神の言葉として信じ、従うとき、人がキリスト者とされることに即す。

また、主イエスは、12弟子たちに、「あなたがたに耳を傾ける者は、わたしに耳を傾け〜」(ルカ10:6)と語られた。主イエスに派遣されて語る者は、派遣されたイエス自身の言葉を聴くことができ、また、これを語ることができし、語らなければならない。

説教の語り方、語り口は、その本質にもとづき規定される。神の全権を受け、大胆に語るべきである。「大胆さ」とは、表面的ふるまいのことで

はなく、むしろ、神の前に立たされて語られているという自覚から生じるものであり、神以外の者を恐れない姿勢のことである。

そもそも説教とは誰に向かって語られるものなのか。説教の第一の聴き手は、三一の神に他ならない。説教は、神に信仰を告白し、神を賛美するところにその本質がある。説教とは、神の御顔の前で、聴衆に向けて語られると同時に、神に対して語る行為に他ならない。したがって、説教は、必ず神への祈禱で結ばれる。また、説教を用いてくださるのは、ただ神のみだからでもある。そもそも、説教そのものが、神からの語りを聴いて、神に語りかけるゆえ、一つの大きな祈禱なのである。

b 第二スイス信条は、説教の本質と説教者の任職論がほとんど一息で語られる。ちなみに、今回の会議では、「誰が」を問うセッションが欠けている。説教者論と教会の職務制度を問うことをおろそかにするのなら、説教は宙に浮いてしまい、本来の機能を果たせなくなるであろう。

説教者の職務、教会の制度および秩序を整えることは、カルバンが指摘するように、教会にとって極めて生命的に重要なことである。「我々の論じるこの秩序とこのような種類の統治を、あるいは廃止しようと努力しあるいは余り必要のないものと見るものはみな、教会の散逸、いやむしろ破壊と滅亡を望む者である。地上の教会の保持のために使徒的・牧者的職務が必要なのと比べれば、現生の命を養い支える太陽の光と熱、また食物と飲み物さえも必要性は劣る。」(『キリスト教綱要IV 3・2』渡辺信夫訳、56頁)

ただし当然のことながら、職務制度が整えられたら自動的に、よき説教者が立てられるという保証はない。ここに説教者論の重要性、つまり説教者の全存在を問う問いが不可欠となる。バルメン宣言に集結した力ある説教者たちは、言わば、「非合法」の説教者たちであつたことを決して忘れてはならない。

3 バルメン宣言における「聖書」と「説教」と「教会」として「キリスト」との関係

a 第一項「聖書においてわれわれに証せられているイエス・キリストは、われわれが聞くべき、またわれわれが生と死において信頼し服従すべき神の唯一の御言葉である。」

この宣言は、聖書の本質を動的に告白する。受肉した神の言葉なるイエス・キリストのみが、生ける神の言葉であり、教会が聞くべき、信頼し、服従すべき唯一の御言葉と告白し、徹底的にイエス・キリストに聴き従う教会の姿を確定する。教会の存亡は、聖書に即するか否か、この一点に尽きることが宣言される。

b 第二項は、第一項の論理展開として、神のことは、罪の赦しへと招く信仰と何よりもまた全生活に対する服従への求めであることを明らかにする。信仰と生活の規範として、また、教会を奉仕へと解放する。その、奉仕の第一の務めこそ、以下で明らかにされる説教である。

c 第三項「キリスト教会は、イエス・キリストが言葉とサクラメントにおいて、聖霊によって、主として、今日働き給う兄弟たちの共同体である。教会は、その服従によっても、またその信仰によっても、その秩序によっても、またその使信によっても、罪のこの世にあって、恩寵を受けた罪人の教会として、自分がただイエス・キリストの所有であり、ただ彼の慰めと指示によってだけ、彼が現れ給うことを期待しつつ生きているということ、生きたいと願っているということを、証しなければならぬ。」

バルメン宣言は、その戦いの主目的とも言うべき、教会とは何であるのかを明示し、そうなるようにと呼び掛け、こうして国家の悪魔的な支配に對抗する拠点を明確にする。教会とは、キリスト者の共同体であると同時にイエス・キリストが聖霊によって主として臨在なさる、キリストの体そのものであることが明らかにされる。(エフエソ4:15-16)

そこで改めて、改革者たちの教会の標識論(説教とサクラメント)が再確認される。バルメン宣言の真骨頂とも言えるだろうが、ここから、キリストが臨在する兄妹たちの体としての教会の使命を語る。つまり、教会が服従、信仰、さらに秩序(教会政治・職務制度)そして使信(説教)によ

って自らが何者であるのかを証すべきことを告白する。ここで、注目すべきは、説教と聖餐、つまりそれがもたらす恵みである神の唯一の言葉イエス・キリストによって生きている教会は、ただ使信を宣言することに留まらず、教会の存在そのものによってこの世に「証」をなすことだと言うことである。ここに説教の主目的、目標が明示される。それは、信仰なきこの世でさへ「読める」言葉、目に見える言葉、理解できる言葉として提示される。つまり、説教は、教会をして、この世に宛てられた神の手紙とすることを目標とするのである。

説教において何を語るのかは、説教の使命と目標を問う問いの中でこそ、具体化される。手紙はすべての人に読まれ、「まことに、神はあなたがたの内におられます」(1コリント14:25)と理解されることを求める。つまり、説教には「礼拝体験」へと誘い、教会を形成する現実的な力がなければならぬ。もし、聖書を忠実に正しく説き明かすことに成功するならば、同時に、それは聴き手に届く言葉であることになるはずである。本質的な課題とは言い難いが、しかし、そこに罪のこの世に生きるすべての人々に届く言葉、コミュニケーションの課題の重要性が浮き彫りにされる。

そのためには、何よりも教会自身が先ず神の言葉なるイエス・キリストの「慰め」に深くあずかることが必須である。神との交わり、コミュニケーションに生きている教会、説教者なくして、説教を担うことはできない。

教会は、説教を通し、三一の神からの「全生活に対する力ある要求」を受けている。そこにおいて教会自身は、神の「愛の手紙」として変容される。神は、教会をどのようににトランスフォーメーションすることによって、世の人々とのコミュニケーションを拡大し、世を神の国に向けて聖化する。教会は神の力ある要求の前に、この世に証をすることができし、しなければならぬ。神の御心は、教会の証を通し、神の国を拡大、前進させ、世界を聖化、つまりトランスフォーメーションすることにある。

なお、ここであえて「福音派」として注目すべき点を挙げるなら、「秩序」つまり教会制度が重んじられていることである。なお、霊と制度とをなお対立概念として捉える思考に留まるなら、教会は容易に「時代の霊」と結託するか支配されるであろう。

d 第六項 「その中にこそ教会の自由の基礎があるところの教会に対する委託は、キリストに代わって、従ってキリストご自身の御言葉と御業に説教とサクラメントによって奉仕しつつ、神の自由な恩寵の使信をすべての人に伝えるということである。」と告白して結語とする。繰り返してキリストの御言葉とみわざを「説教とサクラメント」によって担うべきことが繰り返し言明される。我々もまた、いさかかくどいが、改革された教会として、この生命線から一歩たりとも逸脱してはなるまい。

バルメン宣言は、言わば非合法の教会組織としての声明である。権力によって神の言葉の秩序としての教会組織が破壊されたとしても、教会の生命的務めと働きは、なお継続されなければならないし、そこでこそ、教会組織の再編も目指される。この宣言は、まさにその現実において成立したのである。

同時代に、朝鮮において朱基徹牧師は、大日本帝国の弾圧に対して「説教権」を深く自覚し戦った。そして、このような説教と説教者（殉教者）の戦いが、戦後韓国におけるキリスト教会の復興の原動力となった。彼らのもたらした社会的影響力は、誰も認めることができよう。「人々からでもなく、人を通してでもなく、イエス・キリストと、キリストを使者の中から復活させた父である神とによって使徒とされたパウロ」（ガラテヤ1:1）という信仰に基づく自覚こそ、説教者の究極の土台とすべきであろう。ただし、朱基徹牧師たちは、決して、制度的教会を否定したり、軽んじたことはなかったのである。

Ⅲ. 愛の手紙としての説教、そして教会—市民とのコミュニケーション、世界のトランスフォーメーションを目指して—

聖書 II コリントの信徒への手紙第3章2-4節

「わたしたちの推薦状は、あなたがた自身です。それは、わたしたちの心に書かれており、すべての人々から知られ、読まれています。あなたがたは、キリストがわたしたちを用いてお書きになった手紙として公にされています。墨ではなく生ける神の霊によって、石の板ではなく人の

心の板に、書きつけられた手紙です。わたしたちは、キリストによってこのような確信を神の前で抱いています。」（新共同訳）

A ことばなる神と人間の関係

そもそも、「ことば」に他ならない神は、父と子と聖霊の相互の交わりの方法としても、ことばを持たれる。神の「語り」は、三一の交わりの根拠である。神は、御言葉を語られることによってご自身の御心を実現する「語り行う神」でいらっしゃる。この神の「語り」、つまり、ご意思が外へと発せられる時、無からの創造が起こる。（ヨハネ第1章）

そもそも、人間とは被造物の冠であり、神の語りを聴く能力を与えられ、神との交わり（コミュニケーション）に生きるものとして創造された。したがって、人は神のことばとの正しい関係、応答性において真実の人間となる。

B 神のことばに違反した人間の救済

ところが今、神の言葉に違反した人間は、神との正しい関係を失い、罪の悲惨の状態にある。しかし、神は、罪の悲惨から救おうとして、御言葉を語りかけ続けた。この御業を編んだのが、旧約の物語（救いの歴史）である。

聖書は、罪人に赦しを宣告する贖いの出来事（十字架と復活）を頂点にした神の愛の物語である。それは神からの語りであり、聴いて信じる人には罪の赦し、神の子としての資格が与えられる。

C 聖書をとおして語り続ける神と説教そして教会

使徒たちは、神の正義と愛と平和そのものでいっしやる主イエス・キリストを目撃し、その愛を体験し、証し、説教した。何よりも、その使信を文書にして教会に書き送った。新約諸文書とは、教会に宛てて記された使徒たちからの愛の手紙である。同時に、神からの愛の手紙に他ならない。この手紙は、単に教会だけに送られたものではなく、教会を通して全世界へ公開される、公開状としての性質を持つ。

この聖書を説き明かす説教こそ、聴衆にキリストとの交わりを与える第一の外的手段である。同時に、聴衆ひとり一人をキリストにおける一つの交わりへ

と結び合わせて、神の民、キリストの群れ、キリストの体なる教会共同体とする。

D 説教および説教者と聴衆とのコミュニケーション

説教者は、そのために聴衆と語られた言葉（キリスト）との交わり（コミュニケーション）を成り立たせることに最大限の努力を注ぐ。ここに説教におけるレトリークの位置と意義がある。ただしそれは、徹底的に聖霊の働きの筋道を整える神学的な作業であり、聖霊の主導によってのみ担われうるものである。それなしには、単なる人間的、つまり偽りのコミュニケーションに墮すこととなる。

キリストと聴衆とのコミュニケーションを深めるために、説教者と聴衆との間のコミュニケーション、つまり相互の信頼や愛などを軽視することはできない。そもそも、語り聞くべき福音の内容じしんが、説教者と聴衆をして共に一つの信仰の歩み、つまり、共なる信仰生活及び信仰共同体を形成させる。したがって、説教者と聴衆とが人格的關係にない、もしくは直接的関係を結びえない、たとえばテレビ・ラジオによる説教は、礼拝説教の代行にはなりえない。さらに、教会において「偽証してはならない」との掟がどれほど大切であるかも自明となる。とりわけ説教者への「噂話」がなされるなら、ことばへの信頼まで損なわれ、教会の交わりは破壊されて行くであろう。

E 説教による説教者および会衆のトランスフォーメーション

愛の手紙を聴く教会とキリスト者ひとりひとは、信仰の服従とその程度に従って、この世において自ら愛の手紙そのものとされて行く。つまり、聖化されて行く。今回の研究会議の言葉を用いるなら、生ける唯一の神の言葉主イエス・キリストを証言する存在へとトランスフォーメーション（変容）されて行く。

主イエスは地上にあって、ひたすら語り、語ったことを力ある業で証しされた。確かに主は、御言葉を書き記されなかった。しかし、ペトロを代表とする人間を、ご自身の文書、手紙としてこの世に書き送られた。

確かに、そこに、使徒の特別の位置と存在理由がある。しかし、すべてのキリスト者とは、キリストの弟子とされ、キリストから派遣された者たちである。その意味で、キリスト者はすべて、使徒性を帯びた存在であり、キリストの証人である。とりわけ、神と教会によって立てられた説教者こそ、会衆に先立って、愛の手紙である聖書から御言葉を聴き、彼らのために、新しく語る道具とされているかぎり、それを自覚しなければ、その託された務めにふさわしくない。説教者こそ、神の言葉を生活において実践し、証言する存在としてトランスフォーメーションされるべき第一のキリスト者である。「キリストを見よ」と説教することと、「キリストにある自分に倣え」と勧めることとは矛盾しない。むしろ、聖霊の働きにおいて両者とも不可欠なあり方である。

F 神の語りの公的な道具としての説教と説教者

確かに、説教は、第一には、教会に生きるキリスト者たちを慰め（パラクレシス）、建てあげる（オイコドメオー）ことを目指してなされる。ただし、そこにいる会衆のためだけに語られることばは、説教の十全の機能を担うことにはならない。会衆は、この世にあっては異なる立場を持ち、この世における利害の一致を求めることはできない。原発関連企業、官僚、自衛官……、会社員と経営者が在籍しているかもしれない。反対に、似た職種、職域の方が多い構成であるかもしれない。外国籍の方が在籍しているかもしれない。福音は、すべての人々を裁き、赦し、立ちあがらせる力を持つ。したがって、国益や会員の私益に奉仕するような福音（説教）なるものは、福音の本質からの逸脱と言わなければならない。

その意味で、「わたしは世に向かって公然と話した。」（ヨハネ 18:20）の主イエスの御言葉は、説教者と説教の本質を規定している。説教の言葉は、すべての人々に告げられるべき公的（パブリック）な言葉である。したがって、教会堂にいない人のためにも語られなければならない。教会は、公然と語る説教と説教者によって、世に向かって自らの使信をたずさへ行くことへと促される。したがって、教会の説教は、とりわけ信仰告白の事態において政治的な発言となるし、ならねばならない。

G 説教の実りとしての神の国の中心的あらわれである教会の形成と世界のト

ランスフォーメーション

神は、教会を神の国の中心的な現れとしてこの世に置かれた。神は、神の国を映し出す教会の存在を通して、地域社会と日本、ひいては全世界において、その政治、経済、文化等の全領域にわたって神の国の倫理と栄光を反映させようとしておられる。教会は、神による世界の聖化の基地、拠点として用いられる。聖書の説き明かしとしての説教は、神の国の福音を闡明することによって、教会を建て上げ、キリストの姿へとトランスフォーメーションすることによって、キリストの体の「輪郭」を地上にはっきりと示して、この世界との差異、異質性を明瞭にする。

神の愛の手紙である聖書を通して語られる神の声を教会に告げる説教は、教会共同体そのものを神の愛の手紙として形成する³。教会は、読まれるべき存在として、また、読むことのできる存在となつて、この世に公開され、派遣され、神の国を拡大させるための救いの機関として用いられる。教会共同体は、神の愛の手紙としてトランスフォーメーション（聖化）されるその程度にしたがつて、愛の手紙としての証として影響力を持ち、この世をトランスフォーメーションする道具とされる。説教と説教者は、神の民に向けて語りつつ、教会共同体を愛の手紙として、この世界へと向かわせ続ける⁴。

³ 講演後、「フォーサイスの説教論」を再読した。フォーサイスの、「歴史的に唯一の偉大な説教者は教会である。だから説教者個人の第一の仕事は、教会が説教で生きるようにすることである。」「彼は福音から教会へと説教して、教会とともにこの世に福音を語るようにすべきだ。教会に説教して、同時に、そのことが教会から説教することでもあるようにすべきだ。」「（『フォーサイスの説教論』P・T・フォーサイス、ヨルダン社、1997年、81頁）主張に気づいた。教会こそが説教者であるとは、至言と思われる。

⁴ そこで説教者は、社会活動家としてではなく、教会の代表としてこの世に向き合う。教会の会議を経ないで政治的、社会的活動をすることは、緊急時を除いては自制的であるべきである。何故なら、教会の職務者だからである。ただし、なお市民としての活動は許されるであろう。我々の教会は、かつて地域に向かつて、憲法9条・20条に立ち、擁護する立場を伝道新聞によって明らかにしたことがあつた。また、教育基本法改訂において、反対の声明をネット上で行った。もとより、会議を経た教会的発言としてのことである。

結び

日本のいわゆる福音主義陣営は、敗戦後に創立、もしくは再結成された教会が多い。日本の諸教会は、例外なく、戦前戦中、国家の圧力に屈し、迎合した過去を持つ。神の国の福音を語り、生きるどころか、自ら偶像礼拝の罪を犯し、そればかりか、隣人の諸教会にも偶像礼拝を強要し、戦争に協力する罪を重ねたのである。戦前からの教派、教団はもとより、戦後創立された教団、教派も、戦争責任を負う当事者として、この罪を二度と犯さないようにとの深い悔い改めを抜きにして、日本において教会形成にせいそむことは、神と人との前に赦されないことであろう。

しかし、3・11、とりわけ原発震災の体験によって、戦後の日本の教会は、戦前、戦中と同じ罪を重ねて来たことが暴露された。つまり、国家と政治的、経済的権力者による経済至上主義、人間中心主義の営みの中に埋没して、これを正面から批判し抗うことがなかった。今、この国は、言わば第二の敗戦とも言えき事態に置かれている。しかも誰よりも敗北したのは、キリストの教会ではないか。原子力発電に隠された政治的意図、経済的意図等を見抜き、声を挙げなかった罪責が問われる。核分裂の利用とは、自らを神のようにならまい、隣人を殺すという、典型的で究極的な十戒への挑戦であり、神の平和の支配を拡大すべき教会への根本的な挑戦であることは明らかである。

この国をトランスフォーメーションすべき教会が、かえって、この世の論理を模倣して、例えば、教会拡張運動（効率よい教会成長方策）、繁栄（成功）の福音、内向きの姿勢（自分たちの精神的安定、自己を肯定してくれる居場所としての教会）を目指した教会も少なくなつたのではないか。今こそ、教会がいよいよ神の教会、キリストの主権に服する共同体となること、神の言葉に服従する教会として整え直されて行くこと、そのために、力ある説教によって教会共同体を愛の手紙として形成する奉仕へと徹底的に励まなければならないのではないが⁵。

⁵ 本講演の準備、主題の設定は、11年3月11日以前であった。名古屋岩の上伝道所は、宮城県亘理町、山元町の仮設住宅への個別訪問を継続している。12年8月現在、7回を数えている。第5回以降は、当伝道所チームを軸としながらも、他教会会員、さらには未信者の方々も加わっている。12年5月より、日本キリスト

参考文献

『教会の苦悩』	H・ディーリケ	ヨルダン社	1967年
『聖書の説教とは?』	渡辺善太	日本基督教団出版局	1968年
『教学Ⅰ・Ⅱ』	R・ボーレン	日本基督教団出版局	1978年
『力ある説教とは何か』	H・J・クラウス	日本基督教団出版局	1985年
『説教の神学』	D・リッチェル	日本基督教団出版局	1986年
『神の言葉の神学の説教』	R・バルト/E・トウルナイゼン	〃	1988年
『説教論』	加藤常昭	日本基督教団出版局	1993年
『慰めの共同体』	C・メラー	教文館	2000年
『愛の手紙・説教』	加藤常昭	教文館	2000年
『十字架とハーケンクロイツ』	宮田光雄	新教出版社	2000年
『権威なき者のごとく』	F・B・クラドック	教文館	2002年
『説教の神学』	R・リシャー	教文館	2004年
『説教者を問う』	加藤常昭	キリスト新聞社	2004年
『説教講義』	H・J・イーヴァント	新教出版社	2009年
『フォーサイスの説教論』	P・T・フォーサイス	ヨルダン社	1997年

愛の手紙としての聖書は、愛の手紙としてのキリスト者と教会共同体において説き明かされ、読まれ、見られることを待っている。しかも、キリスト教や聖書に関心をおこされた方は、説教と教会（キリスト者）とを待っている。使徒言行録によれば、このようにして、キリストの福音は運ばれ、その力を発揮してきたのではないか。（使徒言行録8:31）

確かに、今なお圧倒的に多数の同胞は、福音に関心を示そうとしない。しかもし、教会が愛の手紙としての実質をいよいよ獲得し、地域社会と世界にその存在をもって証し続け、認められて行くなら、人々は教会の証によって、聖書の教えにも関心を呼び覚まされ、神の愛を聴き取り、救いと信仰へと導かれるのではないか。

神の言葉は、それを語る人、それを生きる証人によってこそ、その力を発揮する。神の愛の手紙としての聖書の真実性は、神がそれに伴うしるし、つまりキリストを主と告白し、聴き従う教会の形成においてこそ、はっきりと示されるであろう。我々説教者は、そのための説教を、そして教会の形成を目指すべきであろう。

（日本キリスト改革派教会名古屋岩の上教会、愛知県立芸術大学非常勤講師）

改革派教会と宣教協力関係にあるミッション諸国体とが協力して、宮城県山元町に「のぞみセンター」という支援施設を建て、継続的な被災者ディアコニアを担っている。

もとより、被災者支援の奉仕（ディアコニア）は、伝道の手段ではないし、手段化してはならない。これは、教会のディアコニアとして、つまり、教会の不可欠の、本来の務めとして考えられなければならない。ただし、預言者として語り、祭司として祈り、王として奉仕する教会の働きは、各々すべて有機的に結び付けられる。キリスト者はある意味では、非キリスト者と同じ奉仕をするだけかもしれない。しかし、神は、それを神の愛の手紙、キリストの証として用いて下さることを信じてよいのではないか。被災者は、教会の奉仕者を愛の手紙として読んで（見て）くださるのではないか。ただし、中長期的には、ディアコニアに福音の伝道が伴うことも必然であろう。